

石造美術オタクの

ひとり言

⑤ 層塔



高橋 晋也／庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材企画室に籍を置き、平成21年より、究極のこだわり製品として『世伝石塔』シリーズを開発、総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ『庵治石工衆』によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、昨年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、『翼塾』を開講。

こんにちは、(有)翼石材・企画室の高橋です。今回は「層塔」についてお話をさせていただきます。

石造層塔と言えば、どのようなイメージをお持ちでしょうか？どちらかと言えば庭の添景物のイメージが強いのではないのでしょうか。しかし、層塔は歴とした「仏塔」であり信仰の対象物そのもの

です。茶の湯が盛んになり、石灯籠とともに庭の添景物として取り入れられたに過ぎません。

在銘最古の石造層塔は、奈良時代後期 天平勝宝三年(751年)の奈良県高市郡明日香村の「竜福寺層塔」です。また、滋賀県東近江市石塔町の「石塔寺三重層塔」は、無銘ではありますが奈良時代前期の作とされ、現存する最古の石造塔であり、石造三重塔としては日本最大(高さ約7.5メートル)となります。さら

に、この塔を数千の五輪塔が取り囲んでいる姿は圧巻の見応えです。

ちなみに、日本最大の石造層塔は、鎌倉時代中期 弘安九年(1286年)の京都府宇治市宇治塔川の「宇治浮島十三重石塔」(高さ約15メートル)となります。ぜひとも、併せて足を運んでいただきたい場所です。

はじめに層塔の形式について説明させていただきます。一般的な構成は基礎の上に初重軸部(塔身)を置き、その上に屋根と軸を積み重ね、最上層屋根の露盤上に相輪をのせます。相輪は九輪の上に水煙を設けるものもあります。屋根の層数は、三・五・七・九・十三重のものがあり、重なりは必ず奇数となります。ま

た、塔の平面はほとんどが方形ですが、奈良時代後期の奈良県奈良市長谷町の『塔の森十三重層塔』はめずらしい六角形をした層塔です。

では、そもそものような塔なのかということですが、石造層塔は飛鳥時代から伝統を持つ木造建築の層塔を模したもの

であり、木造塔は仏舎利の奉安を目的として造塔されました。ご存じの通り仏舎利とは仏教の創始者釈尊の遺骨であり、インドでは、その遺骨を納めた罌頸型のお墓を「ストゥーパ」と呼び、日本では「仏塔」と呼びます。そして釈尊の遺骨(仏舎利)は功德聚(功德のあつまり)ですから、ストゥーパ・仏塔(仏舎利)を礼拝供養することに

よって釈尊の功德が廻向(功徳を他に廻らし向ける)され、死者も生者も利益と幸せが約束されます。

なお、時代が下るにつれて、塔は仏龕や厨子のようになり、仏像(大日如来や阿弥陀如来、観音菩薩などの理仏)や経典(仏舎利と同一と説かれた法舎利)を安置するようになり、石造層塔も初重軸部(塔身)の表面に、仏の像容や梵字の種子が彫刻されました。さらに塔内には仏舎利や経典、水晶五輪塔、金銅製の仏像などが納められている例もあります。

いかがでしょうか！『おしえてお墓の話 石造美術オタクのひとり言』で述べさせていただいた五輪塔・宝篋印塔・宝塔・板碑の仏塔思想・本質と何一つ変わりません。仏教の善根功德(よい報いを受けるべき因としての善行)は造塔・

造仏・写経をすることであり、仏塔を造塔し、仏像や写経を安置・奉安して礼拝供養をすれば、死者も生者も利益と幸せ(救済)が約束されます。

しかし、ここで

勘違いされては困ることがあります。前回の『おしえてお墓の話 石造美術オタクのひとり言④ 板碑』でも述べさせていただきましたが、江戸時代以降の仏塔は、墓標・墓碑へと変化をしていきます。では何が変化をしたのかということですが、それは現代のお墓は仏舎利・仏像・法舍利(写経とは無縁になってしまい、仏塔・石塔とはほど遠い存在になりつつあるということ)です。もともと仏塔とは前述の通り功德聚ですから、その功德を廻向することによって死者と生者に利益と幸せ(救済)が約束されるのです。

もちろん何度も申し上げていますが、時代の流れとともに人々の考え方や世の中の常識が変わり、葬送文化が変化していくことはごく自然なこと

で、私がいとも思うことがあります。それは仏教公伝以来、仏塔は日本全国に造塔され今日でも多くの遺品が残っています。誰のために建てたのか、今となっては分かりません。でもなぜか見ず知らずのお墓にもかかわらず、そこで眠る人のためにそと手を合わせたくなるお墓、それが中世の石造物です。だから、私もそんな石塔に習い、石の寿命が仮に千年なら千年先までその時代の人々に大切にしてみたい

とお墓作りをしたいと思っています。石造美術オタクのひとり言でした。



安養寺跡五重塔 (国重要文化財)

今回ご紹介する層塔は、滋賀県近江八幡市にある鎌倉時代中期 寛元四年(1246年)の安養寺跡五重塔です。基礎は輪郭を巻き、格狭間は見事な鎌倉式で、三茎蓮華を刻出しています。初重軸部は幅に対して高さがやや高く古調を示し、各面に舟形光背を彫りくぼめ、蓮華座上に頭教四方仏を厚肉彫りで刻出しています。また、紀年銘からこの塔が近江式装飾文様の最古の資料として貴重な遺品と言えます。高さ417.5cm、花崗岩製。

日本人のお墓の本質を学ぶ『翼塾』

第3回翼塾「愛媛県石造美術現地研修」開催

弊紙連載『おしえてお墓の話 石造美術 オタクのひとり言』でお馴染みの高橋晋也氏（44歳）を中心に設立された『翼塾』では昨年12月5・6日の二日間、第3回翼塾「愛媛県石造美術現地研修」を開催した。

今回も東北、中部、

がなされていた。

関西、四国、九州などから会員が参加。初日は、今治市大三島町の大山祇神社宝篋印塔の見学から始まり、大島石材工業(株)制作の五輪塔、大島石の丁場等を見学。その後、大島石材工業(株)代表取締役・小田満弘氏による講演会を開催。夜の懇親会では小田氏も参加して様々な意見・情報交換

二日目は、鎌倉時代の作を中心に今治市、西条市にある9つの石造物を見学。ほとんどの石造物が重要文化財であるが、のどかな田園風景の中や道を一本入った中に建立されているなど、古くから石造美術の文化が地域に根づいていることを実感した研修でもあった。



小田満弘氏と一緒に記念撮影



小田満弘氏による講演会の様子